

《一》次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

「平和の反対語は？」と尋ねられたら、何という言葉を考えていますか？

最初にうかぶ言葉の一つは、「戦争」ではないでしょうか。しかし、わたしたち戦争を直接に経験していない世代は、戦争についてちゃんと理解できているとは言いがたい。それがよくないことだとは知っていますが、メディアで見聞きする以上のことは何も知らない。では、知らないその言葉を反対語にしたところで、当然ながら、想像する元の言葉の輪郭もあいまいにならざるをえない。そう考えると、実はわたしたちは平和というものを考える土台を、そもそもちゃんともってはいないのではないのでしょうか。

二〇二四年三月一日から、絵本作家いわさきちひろさんの没後五〇年の記念特別展「いわさきちひろ ぼつ 50ねん こどものみなさまへ」が催されています(ちひろ美術館・東京、安曇野ちひろ美術館にて)。あそび・自然・平和という三つのテーマを掲げていますが、その企画協力者の一人として声をかけていただきました。自然や遊びに関するワークショップや、テレビ番組の制作協力などには多少経験があったためにお声がけいただけただけかと思っていたので、「平和」というテーマをいただいたときは正直戸惑いもありました。これは拙著『問いのデザイン』(学芸出版社)の視点から、一緒に平和についての問いを考えてほしい、というちひろ美術館さんからのリクエストでした。概念の輪郭があいまいなとき、個人的な習慣としてある問い方の一つが「反対語のワークショップ」です。それで冒頭の問いをまず考えてみました。そこで得た最初の気づきが、「わたしたちは平和のことをよく知らないかもしれない」だったのです。

自分の経験を振り返ってみても、戦争に関係して覚えていることといえば、小学生のときに足を運んだ広島平和記念資料館でみた、凄惨な写真などしか思い当たりません。目をそむけたくなるような写真をみた印象は残っていますが、目をそむけてしまった結果、戦争がどういったものかについての思考もそこで停止してしまっていました。その記憶を除けば、映画や漫画などフィクションの世界か、どこか遠い国同士の諍いをニュースで見聞きしたくらいでしか、戦争のことを知る機会はありませんでした。戦争をすることがよくないことはわかっている、それをなくす具体的な方法や、自らに何ができるかを考える機会は決して多くはありませんでした。

いわさきちひろさん自身は、青春時代を戦時下で過ごし、終戦後もベトナム戦争などの報に心を痛めていたそうです。「世界中のこどもみんなに 平和と しあわせを」ということばを残しているのですが、戦争そのものを扱った作品は必ずしも多くはないそうです。

特別展の相談をするなかで、たくさんさんの絵本を、ハイケンして気づいたのは、いわさきちひろさんは、ただただ日常の子どもの姿を描き続けてきたという事実です。「子どもは、そのあどけない瞳やくちびるやその心までが、世界じゅうみんなおんなじ」。子どもの絵本を描いてきた、いわさきちひろさんならではの視点こそ、わたしたちが平和について考えるきっかけとして大切だと直感しました。

反対語のワークショップで、これまで何万人にも問いかけてきた言葉のうち、とくに多く扱ってきたのが「はたらく」と「まなぶ」です。②チイキ住民や会社で働く大人向けには「はたらく」の反対語を、学校で学ぶ児童生徒には「まなぶ」の反対語について、それぞれ問いかけてきました。

「はたらく」や「まなぶ」の反対語に、あそぶ・楽しむ・休む、といったポジティブな言葉が並ぶことは少なくありませんが、そうなる元の言葉がどちらかといえばネガティブな印象だったことになりました。ある高校での講演で「まなぶ」の反対語を尋ねたときに、「教わる」という言葉を書いた生徒さんがいました。講演後の高校生代表者挨拶で、その生徒さんが「わたしたちは三年間、教わってばかりで自ら学んでいなかったことに気づかされました」とその気づきを紹介してくれました。このように、反対の言葉を一度考えてみることに、言葉の輪郭が見えてくる効果があるのです。

最近、問いかける回数が増えてきた言葉の一つが「すてる」です。講演や出前授業のテーマとして持続可能な社会に関するリクエストが増えているからだと考えられますが、このとき最初に出てくる「リサイクル」「リユース」「リデュース」は、学校の社会の時間などに習う3Rの定着がうかがえます。では、この習ったことのある三つの言葉を使わずに、別の表現で言い換えてもらうとどうなるか。

不要になった日用品を溶かして素材に戻して再利用したり、燃焼時の熱を取り出して利用したりするなど、いわゆるリサイクル技術は、わたしたちが一個人として家庭内で用いることはとてもできません。わたしたちが主体的にできるのはリサイクルゴミとして分別し、適切な回収業者に引き渡すことであり、結果としてリサイクルシステムの一翼を担うことです。ほかにも主体的に持続可能な社会に貢献する方法は何かないでしょうか。このとき生活のなかで用いる身近な言葉で「すてる」の反対語を多様に探ることで、様々なアイデアに結び付きま

す。たとえば「大切に使う」や「譲る」などの表現が、反対語のワークショップでたくさんの人から提案されます。キレイな形状のペットボトルを、一輪挿しとして部屋の飾り付けに使う方法や、不要品をオンラインフリーマーケットで譲るなど、主体的にとれる行動の選択肢がいろいろ増えていきます。

その前に、どうすればその製品を捨てずにスむようになるのでしょうか。それは、製品などにあらかじめ付与された価値とは異なる価値を、もう一度主体的に見出すこと、あるいは自分以外の誰か、そこに価値を見出してくれる人に受け渡すことで、そのモノの価値は延命されます。持続可能な社会は、この価値の付与を、④フダンに創造し続けられる人が集まることによって実現するのではないのでしょうか。ゴミと呼ばれるものは、それそのものに価値がないというよりも、わたしたちのアイデアや工夫が不足し、⑤創造性が欠如することによって生み出されているだけではないでしょうか。

反対語のワークショップを通じて、何気なく使っているわたしたちの言葉、それが表す概念の輪郭をもう一度はつきりさせるきっかけが生まれます。改めて、「平和」の反対語を「戦争」や「争い」といった言葉を使わずに考えるとしたら、わたしたちはどんな言葉に頼りに

すればよいのか。それがわたしの頭から離れない大きな問いの一つとなり、この企画をきっかけに、^E たくさんの人に同じ問いを投げかけたくまりました。

ある人は「差別」や「格差」といった強く否定的な言葉を用い、またある人は「ぎすぎす」や「ざわざわ」といった表現でなんとか頭の中にあるモヤモヤしたものの輪郭を説明しようとしてくれました。「平和」の反対語を考えると、よく知らない「戦争」という言葉だけで、果たして平和にちゃんと向き合うことができていたのか。「戦争はよくない」「戦争はなくすべきだ」。どんなに^⑤ ビジ麗句を並べても、やはりわたしたちは戦争を直接は知らないし、止める方法も起こさないやり方も、理解しているとは言い難い。まずはもつと身近な言葉から、自分たちの知っている言葉を尽くして「平和」の反対語を考えるべきではないでしょうか。

「平和」の反対語についてはまだ考え始めたところで、適切な言葉は見つかっていません。それでも「違いを認めよう」としないこと」や「知らないことを遠ざけてただ恐れること」など、説明可能性を高めてくれそうな重要な言葉も見つかり始めています。日常生活のなかで、自分が経験してきた言葉で説明できれば、少しずつ手元で考えられることも増えてくるはずですよ。

反対語の反対を考えることで、「知らないままにせず、もう一歩近づく勇氣をもつ」「情報を鵜呑みにせず、自ら声をかけて確かめてみる」といったアイデアも浮かんできます。これならどこかの誰かに解決を任せきりにせず、自分たちにも主体的にできることが残されています。この延長線上に平和のタネがあるのであれば、わたしたちにもまだできることがたくさんあるはずです。

そのような視点で改めて、^F いわさきちひろさんの絵本を読み返してみると、平和という言葉が直接に使われていないだけで、絵本のなかに示唆に富むたくさんの視点が見つかります。人生で何か、かなしい気持ちや絶望的な気持ちになってしまったとき、やさしい世界が広がる絵本の一冊を思い出すことで、心の安寧が手に入り、平和に向き合う力の一つとなることを祈念して。

(塩瀬隆之「反対語から考えを深める」 岩波書店『図書』二〇二四年八月号所収)

問一 傍線部A「想像する元の言葉」とは、具体的に何を指しますか。文中から抜き出して書きなさい。

問二 傍線部B『まなぶ』の反対語を尋ねたときに、『教わる』という言葉を書いた生徒さんがいました」とありますが、この「生徒」はなぜ「まなぶ」と「教わる」が反対語だと考えたのですか。説明しなさい。

問三 傍線部C『リサイクル』『リユース』『リデュース』とありますが、「リサイクル」「リユース」「リデュース」を「すてる」の反対語としてしまうことには、どのような問題があると筆者は考えていますか。九十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部D「創造性」とありますが、ここでの「創造性」とはどういうものですか。次の空欄に当てはまるように、文中の表現を四十字以内で抜き出し、始めと終わりの五文字を答えなさい。

「」

「」ことができる能力。

問五 傍線部E「たくさんの人に同じ問いを投げかけたくまりました」について、筆者は「同じ問いを投げかけ」ることでわたしたちがどのようにすることを求めていますか。九十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部F「いわさきちひろさんの絵本を読み返してみると、平和という言葉が直接に使われていないだけで、絵本のなかに示唆に富むたくさん人の視点が見つかります」とありますが、いわさきちひろさんの絵本が示す視点として最も適切なものを次の中から選び、符号を書きなさい。

- ア 人々が絵本を見て共感することで、世界中の子どもに平和をもたらすことが実現する、という視点。
- イ 描かれた子どもの姿からでも、戦争を経験した人々の苦しみを感じ取ることができる、という視点。
- ウ やさしい世界にひたって、悲しみや絶望にとらわれるむなしさに気づかねばならない、という視点。
- エ 世界のどこで生まれたとしても、すべての子どもには、共通するものが備わっている、という視点。
- オ 絵本のやさしい世界にふれば、戦争という残酷な現実に向き合え、という視点。

問七 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

《二》次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

菜々子の息子である航太郎は、神奈川県**の強豪野球クラブ《西湘シニア》**でエースを務めてきた。中学校三年生になった航太郎は、活躍によつては強豪校からスカウトされ、進学先の高校が決まりうる中学最後の大会に臨んでいた。

十一月の和歌山にはすでに冬の風が吹いていた。全国から計三十六チームが参加した和歌山県知事杯で、決して順調とは言えなかったものの、航太郎の所属する西湘シニアは紀三井寺公園野球場で行われる決勝戦に駒を進めた。

この大会に懸ける航太郎の気持ちは並々ならぬものだった。希望する 注1 山藤学園の内田泰明監督が、いつ、どの試合を観にくるかわからなかったことに加え、大会の結果が同級生たちの進路に大きく影響することを知っていたからだ。

いや、西湘シニアの大竹監督がそう焚きつけていた。

「みんながみんなお前のように行きたい学校に行けるわけじゃない。名門校に行けるのか、そうじゃないのか、そもそも高校で野球を続けられるのかもこの大会の結果に懸かっている。お前と一緒に野球をしてきた仲間のためにも、ここは思いきり行ってくれ」

さらに大竹はこんな言葉もつけ加えたという。

「ま、わざわざこんなこと言わなくても、お前は山藤に行きたいんだもんな。イヤでも必死にやるんだろうが」

そのときのうすら笑いがすぐ気持ち悪かったと、航太郎は呆れたように言っていた。実際に口に出すわけではないけれど、菜々子同様、航太郎もまた監督に不信感を抱いている。

「べつに俺のやることは変わらないし、どうでもいいけど」

そう口にする航太郎は平然としたものだだったが、菜々子はモヤモヤした。わざわざ二人きりのときに言うのもどうかと感じたし、山藤の名前を出すのも違うと思った。もつと言え、A こうしてプレッシャーをかけることが好結果につながると思えない。

事実、和歌山県知事杯の航太郎は本調子ではなかった。筋肉質のせい、か、そもそも夏場に強いタイプで、寒くなってくると調子を落とす子ではあるが、それを差し引いてもやけに投げるのが苦しうに見えた。

それでも、航太郎はすべての試合を一人で投げきった。予選のリーグ戦から六対五や、八対六といった接戦続きで、「下級生のピッチャーにも投げさせる」という大竹の約束が実践されることはなかった。

中学野球くらいなら、一人いいピッチャーがいれば大抵強いチームが作れるのだそうだ。「同い年に航ちゃんがいってくれてラッキーだったわ」と、いつか同級生の I 口さがないお母さんが悪びれるふうでもなく言っていた。

その言葉に自分は何を感じただろう。少なくとも優越感などではなかったはずだ。菜々子自身はチームスポーツというものを経験したことがない。最後の大会に負けて子どもたちが泣くのはともかく、保護者まで一緒に泣いて涙を流すのを見るといまだに気持ちが冷めてしまふ。ムードに流されて感極まつている親たちの中で、どう振舞うていいかもわからない。

どちらかと言うと、航太郎も同じタイプだ。先輩たちが最後の大会で負けたとき、同級生たちが号泣する中で、航太郎は一人ボンヤリと宙を見ていた。打線の援護がなく、一失点しかしていないということも関係しているのかもしれないが、チームメイトの中には「冷たいヤツ」と茶化してくる子もいたようだ。

その航太郎が、和歌山県知事杯では間違いなくチームの何かを背負っていた。ずっとつけている背番号「1」がいつもより大きく見える。ちぎっては投げ、またちぎっては投げて。めずらしく航太郎はマウンドで喜怒哀楽を表現していた。その意味では、B 大竹のプレッシャーのかけ方は正しかったのかもしれない。こんなに打たれる息子を見るのははじめてだったが、こんなに楽しそうに野球をする姿もはじめて見た。

その甲斐あって、チームは決勝戦に駒を進めた。そしてその試合の前夜、菜々子と航太郎は大竹に呼び出された。場所は宿舎となつている和歌山市内のビジネスホテルのロビーだ。

めずらしく興奮した表情を浮かべながら、大竹はもったいぶったように口を開いた。

「航太郎、ここまでよく一人で投げてくれた。このチームは間違いなく航太郎が引張ってきたチームだ。本当にありがとう」
まだ優勝する前のこのタイミングで、大竹が何に舞い上がっているのかわからず、思わず航太郎と目を見合わせた。

一人だけソファに腰かけた大竹は何かを確認するように二度、三度とうなずき、航太郎と菜々子の顔を順に見つめた。

「明日、山藤の内田監督が観戦にくるそうです」

「え、本当ですか？」と、菜々子は思わず声を上げた。大竹はまるで自分の手柄のように胸を張った。

「たしかな情報です。ただ、II めが喜びさせるように申し訳ないのですが、基本的には航太郎を見にくるわけではありません」
「どういう意味でしょう？」

「対戦相手の東淀シニアの原凌介というピッチャーと、キャプテンをしている西岡蓮という選手をマークしているというウワサです。もうすでに東淀の試合には何試合も足を運んでいるようですし。ま、実際に今大会ナンバーワンのピッチャーですよ、原くんは」

なんとなく航太郎の顔を横目で見ると、菜々子がいまだに好きになれないチーム共通の丸刈りの頭に、秋だというのにこんがり焼けた肌。口を真一文字に結び、じっと大竹を見下ろす航太郎の表情から心の内は読み取れない。

もちろん感じることはあるのだろう。原くんという同い年のピッチャーを、航太郎がずっと意識していたのは知っている。西湘シニアが出られなかった八月の東京ドームの大会で、並み居る強豪を打ち倒して優勝したのが東淀シニアだったというし、そのチームで大車輪の活

躍を見せたのが同い年の原くんだった。

明日、そのピッチャーを山藤の内田監督が見にくるという。その意味を菜々子はすぐに認識できなかったが、^D航太郎はピンと来たようだ。「わかりました」

大竹は満足そうに目を細める。

「絶対に勝てよな。ただ勝つんじゃない、原なんかよりお前の方がずっといいピッチャーであるってことを証明するんだ」

「はい」

「ある選手を目当てに観にいった試合で、違う選手が引つかかるなんてよくある話だよ。プロのスカウティングでも起きることだっていうからな。明日からしばらく大会はないし、思う存分放ってこい」

「はい」

「もしお前が本当に山藤に引つかかれば、うちとも正式に縁ができる。今後、後輩たちが山藤に進む足がかりにもなる。航太郎、みんなの期待に応えてやれよ」

最後の「はい」の声だけ、一瞬の間があつたことを菜々子は聞き逃さなかった。

「話は以上だ。今日は早く休みなさい」という言葉を置いて、大竹は先に部屋に戻っていった。

二人きりになったロビーには不思議な緊張感が立ち込めていた。外での航太郎は家にいるとき以上に口数が少ない。例によって「それじゃ」もなくエレベーターに向かおうとしたところを、菜々子は思わず呼び止めた。

「ちよつと、航太郎」

無言で振り向いた航太郎はひどく気怠そう^{だる}で、怯みそうにもなつたけれど、このまま部屋に戻しちゃいけないと思った。

菜々子は持つていた自分のバッグを指さし、「^Eちよつとつき合つて」とだけ口にする。航太郎はすぐに察したようで、うんざりと「いい加減やめろよな」と言いはしたものの、素直にに応じてくれた。

幸いにも正面玄関脇の喫煙所^{きつえん}に人はいなかった。菜々子にとってタバコはお守りみたいなものだ。航太郎の願いを聞いて家ではベランダでしか吸っていないし、それだつて大抵は航太郎の寝たあとだ。本数なんて週に数本というレベルであり、和歌山に来てからはまだ一本も吸っていない。

それでもどうしても手放すことができないのは、タバコの煙に亡き^な健夫の匂いを重ねるからだ。航太郎は「そんなのやめられない人間の言い訳だろ」と手厳しく、実際にそういう面もあるのだろうが、どうあれやめようとは思えない。

吹きさらしの喫煙所はかなりの寒さだった。明日、大切な試合を控えている^{ひか}というのに、航太郎はウインドブレーカーを脱ぎ、菜々子に渡そうとしてくれる。

「いや、いらないよ。これで風邪なんかひかれたら私が怒られる」

「こんなところにつき合わせておいてよく言うよ。大丈夫だつて。俺べつに寒くないし」

「いいから着てなさい。私も大丈夫だから」

菜々子は震える手で懸命にタバコに火をつけ、航太郎から顔を背けて煙を吐いた。二人の間に沈黙が降りる。呼び止めはしたものの、特別伝えたいことがあるわけじゃない。もちろん航太郎から何か言ってくることもない。

菜々子がタバコを吹かすだけの時間が延々と続いた。結局、それ以上の言葉を交わすことのないままタバコは早々に短くなり、菜々子はそれを揉み消した。

「ごめんね。戻ろうか」

なんだったんだよ、という不満が飛んでくると思ったが、航太郎は「うん」と言うだけだ。そしてボンヤリと空を見上げたあと、思わずという調子で切り出した。

「人格者なんだつて」

「えっ? ごめん、何?」

「山藤の内田監督。現役^{えんぎ}の選手も、OBの人たちもみんな尊敬してるんだつて。それってすごいことだと思わない? 野球部の監督が尊敬されてるなんて、俺ちよつと想像できなくて。そんな監督の下で野球をするの、いいなと思つて」

突然の航太郎の^{注3}饒舌^{じょうぜつ}に、菜々子は一瞬ついていけなかった。頭の中で言葉を^{注4}反芻^{さう}し、それが痛烈な大竹批判なのだとようやく認識して、たまらず噴き出した。

「航太郎、明日がんばりなね」

なんとなくしたくなって、丸刈り頭を思いきり撫で回した。絶対にイヤがると思ったのに、航太郎は素直に「うん」と応じる。菜々子はうれしさを止められなくなった。

^F「チームのためなんて思わなくていいからね。自分のためだけにがんばりな」
「わかつてる」

「明日は航太郎の人生が決まる日だよ」

勝手に熱くなっている母親に^{III}辟易^{ひきえき}することなく、航太郎は最後までまっすぐに「そうだね。悔いのないようにやってくる」と言い切った。

注1 山藤学園：全国有数の野球強豪校。スカウトされた有望な選手しか野球部に入ることができない。内田監督は毎年、和歌山県知事杯に来て、選手の視察をしている。

注2 健夫：菜々子の夫であり、航太郎の父。

注3 饒舌：口数が多いこと。

注4 反芻：繰り返して考えること。

問一 二重傍線部Ⅰ～Ⅲの語句の意味として最も適切なものを、それぞれ後の選択肢から選び、符号を書きなさい。

Ⅰ 口さがない

- ア 言葉は丁寧だが、本心では反対のことを考えている
イ 他人のことについて、無遠慮に言いふらす
ウ 相手を気遣い、言葉を選んで慎重に発言する
エ 雰囲気が悪くしないために、機嫌をとる
オ 思ってもいないことをつい言ってしまう

Ⅱ めか喜び

- ア あとでがっかりするような一時的な喜び
イ 思わず声を上げたくくなるような心からの喜び
ウ いまいち気持ちに整理がつかないかすかな喜び
エ 嬉しくない気持ちを抱えたまま我慢して示す喜び
オ 信じられないようなことが起きた驚きに満ちた喜び

Ⅲ 辟易する

- ア につこりする
イ つつかかる
ウ いきどおる
エ とらわれる
オ うんざりする

問二 傍線部A「こうしてプレッシャーをかけること」とありますが、これは大竹がどのようにすることですか。五十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部B「大竹のプレッシャーのかけ方は正しかったのかもしれない」と菜々子が考えているのはなぜですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、符号を書きなさい。

ア 航太郎が今までよりも楽しそうにプレーをしながら大会を勝ち進んでいくことは、監督やチームメイトだけでなく、チームメイトの家族をも喜ばせることにつながるから。

イ 寒くなつてくると調子が悪くなるという体質のために今回の大会では本来の力を出せずにいた航太郎が、大竹との約束をはねのけて、一人で完投することができたから。

ウ 先輩たちの最後の大会では試合に負けて、仲間が号泣する中でも感情を見せなかった航太郎が、この大会では楽しそうに試合に熱中し、エースとしての頼もしさを感じさせていたから。

エ 航太郎が本調子ではないためにこれまでにないほど対戦相手に打たれてしまったが、いつも通りの落ち着いた対応でピンチを切り抜けたことで、チームは順調とは言えずとも勝ち上がったから。

オ 母である菜々子に似て気持ちを表に出すことの少ない航太郎が、今大会ではめずらしく気持ちを前面に押し出し、チームメイトにも全力を尽くして野球をするよう求めていたから。

問四 傍線部C「大竹が何に舞い上がっているのかわからず」とありますが、ここでの大竹はどんなことに舞い上がっていたと考えられますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、符号を書きなさい。

ア 自分から厳しい言葉をかけられた航太郎がこれまで以上の活躍をしたことで、教え子の成長を手助けできたことと実感したこと。

イ 不調の航太郎を信じて登板させ、決勝戦まで進出したことで、選手たちとその保護者から、更なる信頼を得ることができたこと。

ウ 東淀シニアの原凌介と航太郎のエース対決という触れ込みで、内田監督を決勝の観戦に呼ぶことになったとか成功したこと。

エ 航太郎の活躍によって大会での優勝がほとんど決まったことで、チームの選手みんなの将来が安泰であると確信したこと。

オ 航太郎が明日の試合で内田監督の目にとまれば、今後山藤学園に自分が育てた選手が入りやすくなるという期待をもてたこと。

問五 傍線部 D 「航太郎はピンと来たようだ」とありますが、ここで航太郎は何に「ピンと来た」のですか。六十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部 E 「ちよっとつき合つて」と言つたときの菜々子の航太郎に対する気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、符号を書きなさい。

- ア 不安と愛情
- イ 期待と義務感
- ウ いらだちと親心
- エ 焦りと失望
- オ 心配と懐かしさ

問七 傍線部 F 「チームのためなんて思わなくていいからね。自分のためだけにがんばりな」とありますが、このように言う菜々子の気持ちを百二十五字以内で説明しなさい。

〈四十点〉

《三》次の①～⑮の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① ザユウの銘。
- ② その条件はシヨウフクしがたいものだ。
- ③ 牧場では冬に向けてシリヨウをサイロに蓄えた。
- ④ 海外への挑戦を表明した選手の、今後のキョシユウが気になる。
- ⑤ 村はずれにあるチヨスイチ。
- ⑥ 厳しそうな彼は、見た目とはウラハラに面倒見がよい。
- ⑦ 彼女の実績はヒルイなきものである。
- ⑧ 容疑者はキヨウジュツをくつがえした。
- ⑨ 臓器イシヨクが成功した。
- ⑩ ザツコクマイを食べる。
- ⑪ 費用を二人でセツパンする。
- ⑫ 消毒用のアルコールがキハツする。
- ⑬ 権力者にツイジユウする生き方はしたくない。
- ⑭ その僧は精神をシュウヨウすることの重要性を説いた。
- ⑮ 錦江湾と桜島をシャツケイとする庭園としてつくられた仙巖園。

〈十五点〉